

君去りし
のち

平木奈織

君去りしのち、(サンプル)

平木奈織

あらすじ	4
君去りしのち、	5
平成二十二年八月五日木曜日	12

あらすじ

東京都板橋区の高島平団地で、子供達八人が、自らの目をくり貫いた集団自殺が発生した。大林刑事は自殺者達と会っていたとの目撃証言がある、無職の田島を追い、彼の故郷である九州筑豊地方の山間部にある字水野町にむかう。だが田島の行方を探すうちに、各自殺者達の血縁関係をたどると、必ず誰か一人が字水野町出身者であることが判明する。また時を前後して、彼等の家族が失踪、もしくは事故死していたのだ。

大口真神信仰と特異な風習が未だに息づき、商業学園都市として、過疎化からの再生を模索している字水野町。調査を進めるにつれ、地元の郷土史家である土屋から、この町の成り立ちが、隠れ里であることを知らされる。江戸時代黒田藩に発見されるまでは、周辺地域で「朝見ずの里」と噂され、迷い込んだ者達を殺害して、村の場所を外界に知られないようにしていたのだ。さらに田島が中学生のころに付き合っていた祀(故)が、代々この地域を束ねてきたシャーマンの家系であり、すでに解散した狗側降霊会の巫女であることを知る。

刑事としての立場上、胡散臭いと思いながらも、祀の従兄弟である霊能力者原田の協力のもと、自殺した八人と失踪した家族や、シャーマンである祀の過去と、町の特異な風習などの、点と線が繋がろうとしていた。

君去りしのち、

君去りしのち、僕はずっと頭がおかしかった。祀、君が自殺をして十年がたち、僕は二十五歳になった。今までは頭がおかしいことを知らないフリをするか、頭がおかしくはない人を演じてきた。けれども、もう限界だ。もう僕は頭がおかしくて、いつも頭がおかしくて、これからはさらに頭がおかしくなっていくのだ。その証拠に今気がついてみたら、折れたカッターナイフを持つ右手から血を流している。赤黒い血が流れ落ちていく先には、雑誌に写ったAKBの誰かの顔に、カッターの刃が突き刺さっている。異常だ、完全に狂っている行動だ。もう気違いだ。そう、完全に頭がイッてる。でもまだ安心だ、自分の頭が狂っていると認識しているから、まだ発狂していない証拠だ。だからまだなんとかなる。なんとか助かるかも知れないと、狂気の片隅で希望があるから、護符代わりに神社の鳥居の写真を、壁や天井などいたるところに貼付けた。そう、天井に貼付けるのはとても苦労した。僕は考えたのだ、確証もなく勝手な思いつきだが。君は狗側の巫女だ。巫女と神社繋がり、もしかしたら鳥居からなにかの力がでてきて、護符や結界の代わりになるのではと考えたのだ。もちろん気休めだが、少しは気持ちが落ち着いた。気持ちが落ち着いたはいいが、もう二ヶ月間もずっと引きこもっていて、カップラーメンを買いにコンビニに行くときにしか外にでていない。そう、なぜなら仕事を辞めたからだ。否、クビになった。清掃会社の契約社員で額面十九万円の安月給では、貯金なんて貯まるわけがなく、カツカツの暮らしの社畜だった。だから今、二ヶ月分の家賃を払っていない。貯金もないくせに、働いてないからだ。働いていないのに職を探すこともなく、村にいたときとおなじように引きこもり、ムダな日々を過ごしていたのだ。否、今まさに過ごしているのだ。まず初めにガスを止められた、電気も水道もいつ止

められるかわからない。失業保険の給付を受ければ、少しはなんとかなるだろう。けれども給付申請のために、何度も池袋のハローワークにいき、多くの目に見張られるのはとても耐えられない。だから腹が減ったときにだけ、近くのコンビニに行くために外にでるのだ。カップラーメン、あんまん肉まんピザまん、サンドイッチにパン、おにぎりの食生活だ。そうだ、僕は見張られている。君が去ってからだ、ずっと見張られている。そう、狗側の視線を感じ続けている。最初は両親だった。父と母の目から見張られている気がして、近所の人達の目に見張られている気がして、村中の人達から見張られているような気がしたのだ。だからだろうか、高校生になってすぐ引きこもりになり、十八歳の時に村から逃げだして東京にやってきた。九州の田舎から東京にでてくれば、もう見張られることもなく、引きこもっていた僕のことを知る者もない。そしてもう一度生活を、人生をやり直すことができるはずだと、すがりつくように期待したからだ。そう、君が教えてくれた。君が教えてくれたのだ。こんなことを言わなくても、君は全て知っている。それは、君が教えてくれた選択だからだ。君が村から、現世と幽世のはざまから、逃げだす術を教えてくれたからだ。選択は間違っではなかった。つい最近までは、間違っていなかった。村から逃げだして。そう最初は蒲田のパチンコ屋の寮に入って働いていた。三年間働いた。けれども引きこもりだった僕は、人付き合いが苦手で協調性が持てず、仕事もなかなか覚えることができなかった。もちろん出世することなどできずに、ずっと後輩の下で働いた。そんな生活が三年間続いた。三年もだ、信じられるかい。信じたくなんかないが、これが現実だった。だからパチンコ屋を辞めた。このときは貯金だけは溜まっていた。趣味などなかったし、職場と寮を往復する生活だったからだ。休日は自分の部屋に引きこもり、テレビを眺めながらケータイをいじっていた。その後三回職を変えた。労働派遣で宅配会社の倉庫で働き、警備会社でビルの常駐警備をした。それとこの前クビになった清掃会社だ。最初の仕事を辞めるころには、三十万円くらい貯まっ

ていたが、いつからか趣味がパチンコだけになってしまい、今ではこのザマだ。また引きこもりの世界にもどるのだろうか、もう子供の時のように人とおなじ世界に住むことはできないのだろうか。そんな不安にかられたときだ、東京にきてからもずっと見張られていることに気付いたのだ。それが清掃会社をクビになる二ヶ月前からだ。九州の村から離れている東京だから、誰も僕のことを知らない。そんな安堵感が、見張られていたことを気づかせなかったのだろうか。どちらにせよ見張られている視線が気になりだし、仕事は毎日ミスの連発だ。いつも年下の上司に怒られながら、同僚の笑っている口元と見下している視線を感じて過ごしていた。もう毎日が苦痛で、日に日に自分が嫌になってきて、自分が惨めになってきたのだ。どうしてこんな思いまでして、生きなければならないのかと、胸が苦しくて涙が滲んできてしかたがなかった。そう、口を半開きで上目遣いに空を見上げた。ずっと見張られている、通勤中の雑踏の背後、山手線の混雑している人々の中、扉や壁の隙間、ショーウィンドウや鏡のむこう側。街やビルの監視カメラは、絶対に僕を見張るためにあるのだと思えてならない。被害妄想と言われてもかまわない。むしろそうであって欲しい。しかし実際に見張られているのだ、視線を感じるし気配を感じることもある。監視されている。もう時々ではない、毎日、毎日、毎日。昨日も今日も明日もだ。村で引きこもっていたときも、ここまで酷くはなかった。もう異常だ。異常すぎて視線が怖くて、人と目を合わせるのが怖くなった。ある日、仕事中に後輩で年下の上司がモップで僕の背を突きながら、人の目を見て答えるよと言ってきた。なぜそんなことを言ってきたのか思いだせないが、たいしたことではなかった気がする。たぶん、いつものように僕が初歩的なミスをしたのだろうか。そのときだ、上司の目から見張られているように思えて、モップを取り上げると振り回して暴れたのだ。だからクビになった。それから僕を見張っている視線だけではなく、全ての人の視線が怖くなってしまい、部屋の外にでるのが怖くてたまらなくなったのだ。実は神経質になりすぎた

だけで、気のせいではと考えたこともあった。でも見張られている視線や気配を感じ、この震えが止まらないのだ。こんな精神状態は異常だと気付いている。だからまだ狂っていない証拠なのだ。まだ正気を保っている。しかしどこまで正気でいられるのか自信がない。ひょっとしたら、もうすでに気違いになっているのかも知れない。雑誌に印刷されているAKBの目を、カッターで突き刺していいただなんて、とても正気の者がする行動じゃない。それにいつからこんな気持ち悪いことをやっているのか、その認識がまったくないのだ。いつからやっているのだ。何分前か、何時間前か、何日前か。いつからやっているのだ、いつからやっていたのだ。まだ正気なのか、それとも気が狂っている狭間の正気なのか。そうだ、なにをしていたのだ。僕はなにをしようとしていたのだ、なにをしたかったのだ。でも早く血が流れている手の手当をしないといけない。怪我をして手が切れていると認識したからだろうか、痛みで手の平が疼きだしてきて汗か吹きだした。汗が噴きだし目の中に入る。汗が目には滲みて痛い。でもこのボロアパートの部屋には、薬も絆創膏も置いていないのだ。あるのはマンガとコンビニ弁当と汚れた洗濯物や、埃と虫の死骸とゴミだけだ。なにもなく、なにも残っていない、僕が東京で過ごしている部屋。これが君が去ってからの、僕の全てであり結果なのだ。なんてつまらない十年間だ。なんのために、なにをするために僕は生まれてきたのだ。人からバカにされ続けていて、友達なんていない。ケータイのアドレスには十三件しか登録がなく、そのうち人の名前は七件。全部会社関係の人の名前だ。このケータイは七百件アドレスを登録できるのに、全部でたったの十三件しか登録していないのだ。いったい今まで人とどんな会話をしてきたのだ、どんな付き合い方をしてきたのだ。悲しくなってきた、泣いてしまいそうだ。否、もう涙がでてきているのか、それとも汗が目に入っているだけなのか。そうだこうしているあいだにも、血が止まることなくくすんだ埃だらけの畳の上に流れ落ちて、赤黒くし沈殿している。カッターの刃を捨て、右手を握りうずくまる。どうなっ

てしまったのだ、どうなるのだこれから。もう嫌だ、こんなのは嫌だ。もしかしたら助からないのだろうか。この惨めさから逃れるためには、死ぬしかないのだろうか。でも死ぬときはこの右手の痛みより、もっと痛いのだろうか。当然だ痛いに決まっている、苦しいに決まっている。君もそうだったのか、君も痛かったのか。否、違う。君は苦しかったのだ。そう、首吊り自殺をしたからだ。死ぬまでのあいだ苦しかったに違いない。苦しみは何十秒続いたのだろうか、何分間続いたのだろうか。死にいく意識は、どのくらい長く感じていたのだろうか。それとも一瞬だったのだろうか。その時、君はなにを考えていたのだろうか。ただ苦しみ続けていたのだろうか。それとも君とおなじように首吊り自殺をした、君のお父さんのことを考えていたのだろうか。君は僕のことを思いだしてくれたのだろうか、一瞬でも僕のことを考えてくれたのだろうか。でもやはり、そんなことはなかったのかも知れない。君と僕が会話を交わした日々なんて、ほんの数ヶ月間だけなのだから。付き合っていたわけでもないし、恋人だったわけでもない。ほんの少しだけ交流があって、ほんの少しだけ僕が悩みを聞いてあげただけだ。でも僕は君のためになにかをしてあげたいと思った。あの狂った狗側から、あの狂った村の歴史から救ってあげたいと思ったのだ。確かに、あのとき中学三年生だった僕はなにもできなかった。それは今でも変わらないだろう。こんな情けのない僕だ、協調性もなく仕事もできないし、もうなにもない。なにもだ。なにもないどころか、この十年間の年月でなにもしてきていないのだ。でも、この気持ちだけは本当だ、この思いだけは本当だ。あの時と変わらない僕の君に対する気持ちは、このまま狂ってしまっても決して変わらない。この気持ちだけは変わりはない。でも、バカだな。もう君は死んでしまっていて、助けることなんて永遠にできないのに。それになによりも、僕は君を狗側から助けることができなかった。それにしても僕はどうなるのだろうか。どうせならこのまま餓死して、終わりにしてもいいかもしれない。でも餓死する前に外にでていき、万引きか無銭飲食でも

して捕まるのだろうか。もちろん身元引受人は親だから、村から父さんがでてきて引き取られて、家賃滞納のこの部屋も引き払って、実家でまた引きこもりの日々にもどるのだろうか。そのまま生きる醜態をさらしたとして、この先どのくらい生きて屍のように過ごすのだ。後何年間、後何十年間、人生をムダに過ごすのだ。両親が先に死んでしまったら、僕はどうなるのだろうか。僕とおなじような引きこもりの人達は、いったいどう考えているのだろうか、不安はないのだろうか。それに僕が家にもどると、智子はどんな顔をするだろう。智子は可愛い妹だ。でも引きこもりになった僕と、もう十年以上も口を聞いていない。僕が家をでていくと両親に話したとき、なぜだか智子がニヤついた横顔をしていたのだ。智子は僕と違ってしっかりとしている。だからもう一度だけでいいから、最後にお兄ちゃんと呼んで欲しい。だがまず手の痛みを取らないといけない。サティにいて消毒液と絆創膏と包帯を買って、早く手当をしないとけない。否、サティより薬局のほうがいいだろう。サティは人が多いから、見張られているようで人の目が怖い。薬局も東武練馬駅前の、マクドナルドのすぐ隣だから人通りは多いが、たぶんサティよりはましな気がする。それにしても全財産は幾らあるのだ。これで飯代がなくなるかもしれないけれども、もう皮膚が切れた痛みをガマンできないのだ。空腹の体に力を入れて、フラつきながら玄関まで歩く。もうどのくらい風呂に入っていないのだろうか。そう服も着替えていない。寝癖の付いた髪で無精髭をはやし、頭のイカレかかっている貧相な男が外を歩く。女の人達はみんな僕を避けるだろう。それこそ生ゴミを見る目で僕を見て、触れることのないように避けるに違いない。当然だ、男の僕だってこんな汚い奴に、近寄りたくはない。きっと今の僕に近づいて接してくれるのは、犬か虫かホームレスくらいだ。そうだ駅の雑誌用のゴミ箱や、電車の中に捨てられているマンガを拾い、カード下や地下鉄の地上出口で売っている連中を、僕は蔑んだ目で見ている。ただそれが自分自身になるだけなのだ。因果応報なのか。でも、そんなことはどうでもいい。

もうどうでもいいと扉の前まで来たときだ、外で田島雅之さんと僕を呼ぶ声が聞こえ、反射的にハイっと答えてしまった。しまった、うかつだった。もう隠れようがない、居留守をすることができない。いったい誰だ、誰なのだ。誰がいるのだと耳をすます。電気代の集金かそれともなにか。この扉のむこう側に、確実に誰かが立っている気配がする。それも一人じゃない。物音はしないが一人じゃない、数人の気配が扉のむこう側でしているのだ。気のせいかな。否、気のせいではない。扉のむこう側に、扉の外に、確実にいる。音はしない。する音は冷蔵庫の駆動音だけだ。否、違う、違う、違う。僕が呼吸する音と心臓の鼓動が聞こえているのだ。呼吸をする音はこんなにも大きいのか、心臓の鼓動はこんなにも大きいのか。冷蔵庫のモーター音よりも、確実に大きいのだ。額から流れでた汗が頬を這う音が、鼓膜を振るわせて聞こえてくる。扉はすぐそこだ、すぐ目の前で、肘を曲げてしまえばドアノブに触れてしまうほど近い。汗は噴きだしているのに口の中は乾燥していて、閉じた口の中で、舌が上顎に張りついていてしまっている。いつのまにか手の平の痛みが消えている。なぜだ、切れた傷口が開いている感覚があるのに、まったく痛みを感じない。どうする、どうするのだ。このままずっとこうしているのか、ずっと立ち尽くしているつもりなのか。また僕の名前を呼ぶ声がする。それに応える。でも応えたのは、声はでない。発せられたのだ、発せられたのは空気が喉を通る音だけだ。続いて扉を二回ロックされ、早くでてこいと無言の圧力をかけられた。そうだ、いつまでもこうしているわけにはいかない、どうせなにかの。そう、なにかだ。借金はないのだ、だからサラ金の取り立てがくるはずがない。NHKや区民税か年金かなにかだろう。それとも新聞の勧誘か。どうせそんなところだろう、世の中そんなもんだ。そうだ、そうに違いない。少しずつ扉に首を伸ばすほどに、心拍数が跳ね上がるがわかる。少しずつ前屈みになり、鼻の頭から落ちた汗がサンダルに当たり、弾かれた音が鼓膜を振るわせる。ゆっくりと除き穴に右目を近づけて、外を覗き見る。もう限界だ。なん

てことだ、見張られているじゃないか、八人に見張られているぞ。狗側の狗の目をした奴等だ。

平成二十二年八月五日本曜日

狐のお面なのか。でもどうして白ではなくて茶色で、ビー玉の目を入れているのだ。この町の神社では、茶色いお稲荷様を祀っているのだろうか。庭にいる柴犬が吠えるなか、大林俊夫巡査長は玄関の柱に飾られている狐の面を見ながら、住居兼事務所となっているのだろう、佐藤工務店の呼び鈴を鳴らす。返事がないのでもう一度鳴らすと、柴犬の吠える声を打ち消すかのような、野太い男の返事が聞こえ、引き戸の玄関が右側に開く。

「はい。どちらさん」

なるほど、野太い声に似合う身長百八十五cmくらいの、腹のでた毛深い巨漢だと大林は思う。口髭を生やし顎の剃り跡が青いが、頭の毛は結構きている。身長百六十七cmそこそこの大林は見上げて話しかける。

「すみません。ちょっとお聞きたいことがありまして」

「なんね」

「私、こういう者です」

大林は警察手帳を見せる。

「なんでヒネがくっとね」

佐藤が左側の頬を吊り上げ視線を逸らし眩くが、柴犬の吠える声とヒグラシやアブラゼミの鳴き声にかき消され、大林の耳には聞こえない。

「すみません、お休みのところ。少しお尋ねしたいことがありまして」

「なにか事件でもあったと。刑事さんどっからきたんばい」

「東京からきました」

「東京。また遠いところからきたとね」

「ええ。なかなか良いところですねこの町は、東京は人が多くて緑もないし、ほんと毎日息がつまりますよ」

「まあ町っちゆうよりも、ほとんど村ばいここは」

「そうですか。私も定年を迎えたら、この字水野町みたいなところで、ゆっくりと老後を過ごしたいですね」

「で、どげんしたん。なんの事件ね、なん聞きたいん」

「ああ、すみません。よろしければお聞かせ願いたいのですが、この顔に見覚えはありませんか」

スーツの内ポケットから一枚の写真を取りだして、この人ですがと佐藤に見せる。すると彼はしばし黙って見つめたあと、左の眉を少し吊り上げて問いかける。

「誰ねこん人」

「ええ実はですね、東京の高島平というところで集団自殺がありまして。彼はそこで自殺をした障害者の人達と一緒にいたみたいなので、少し事情を聞きたいと思ひまして」

「ヨーゴか。めんどくさい奴等やね」

「へ、なにがですか」

「なんでもなか。で、こん人が犯人ね」

「イヤ、イヤ。そうじゃありませんよ。参考人ですよ、ただの参考人。で、この人を知りません」

「知らんばい、こげな男は」

「そうですか。それではお邪魔しました、お忙しいところ失礼しました」

ご苦労さんと言い佐藤が閉めた玄関を後にし、いくら実家が近くにあるとはいえ、もう七年も田島雅之は里帰りをしていないのだ、誰も顔を知らなくても当然なのかと夏空を仰ぎ見る。この福岡県霞が住市字水野町では、陽の光と共にセミの鳴き声が降り注いできて、額にとめどなく汗を浮かばせるのだ。

しかし東京と違って空が高くて蒼く、浮かぶ雲もコンクリート色ではなく真っ白だ。排気ガスとアスファルトの臭いもしないし、

チョット日陰に入るとビルを冷やしている堅い冷房の風などより、流れてくる微風が柔らかくて涼しい。まさに涼とはこのことではないか。

東京生まれの東京育ち、警察官になっても都内と横浜の所轄にしか勤務がなかったので、のんびりとした時間の流れは新鮮で落ち着く。こんな風に考えるようになったのは、歳をとっておっさんになってしまったからなのだろうか。まあ確かに二ヶ月後には四十三歳だ。昔はこんなことを思うことはなかったし、田舎で暮らしたいなんて考えることもなかった。最近では布袋寅泰のギターよりも、聞き込み張り込みのときに飯を食べる『富士そば』で、小節を回して流れてくる演歌のほうに心が沁みたりする。まさに刑事ドラマの世界そのままだと、雰囲気酔ったりしているのではないかと思う。『はぐれ刑事順純情派』のような、地に足を付けた捜査をする刑事になった気がする。まあ実際にキャリア組ではないので、地に足を付けた捜査しかしていないのだが。

それはそうと、車がないのは大変ツライ。ここはニュータウンの住宅街からかなりはずれた、昔ながらの住民が多く住む四方を山に囲まれた町なので、車がないと移動は一苦労だ。また町から町への移動だけで時間がかかってしまい、聞き込みの件数も限られ、調べるために役場に行くのも大変だ。そういえば大分県の中津からきた同僚が言っていたな、田舎ではみんな高校を卒業するころに車の免許を取り、ローンで組んで車を買っていると。確かにこんな田んぼと畑とあぜ道が続き、バスが一時間に四本しか通らない田舎では、せめて原チャリでもないところにもいけない。自転車では山の登りがツライし、街灯が平気で数百メートルはない通りもある。それに現状困った問題として、机を一つだけ借りている所轄まで、山を二つも越えなければならない。さすがに毎日、所轄に出勤したのちここまで西鉄バスに揺られ、聞き込みに行くのは疲れる。それにもう一週間もたつというのに、田島の有益な情報はゼロだ。まあそんなもんさ。簡単に被疑者が見付かり事件が解決するのならば、誰も

苦労しないか。否、間違った田島は被疑者ではなかった。集団自殺についてのただの参考人だ。だからだろう、こんな九州の筑豊地方に飛ばされたのが、自分一人だけなのだ。

大林は次の飯塚市までいくバスが十五時二十分だと時刻表で確認し、それまでの四十分ほどを潰すため、柴犬を連れて庭で家庭菜園をしている老人にむかい歩きだす。

十八時に霞が住警察署に帰り着くと、黒田署長が扇子で顔に風を送りながら話しかけてくる。

「どげんアンバイね、なにかいい情報はあったとね」

大林は敬礼をして答える。

「はい。恥ずかしい話ですけど、一日中田舎道を歩いただけです」

「そうね。まあそんな敬礼なんてカタッ苦しいけん、楽にしちゃり」

「はあ、そうですか」

「マジメで結構、結構。ウチの上島なんて、俺に敬礼なんてしたこと見たことないバツェン、そろそろ再教育しなあかんとかね」

「そうなのですか。上島さんには大変助けてもらっています」

「そう言ってもらえると、お世辞でも嬉しかばい。なんせこの田舎では事件といえば、ガキ同士のケンカや万引きくらいっち」

「高島平署と違い平和でなによりですよ、事件ばかりはよくありません」

しかしここの署内も冷房が効かなくて蒸し暑い。都内の所轄もそうだが、あらゆる面においてインフラが古くて困る。聞き込みで民間の社屋に入るといつも思うのだが、机やイスやOA機器にしる、もう入り口のIDカードによる入館からして違う。都内でそんな最新の機器を使用しているのは、ごく一部の所轄か部署だけだ。『踊る大捜査線』などのテレビドラマを見ている一般人は、絶対に警察は金食い虫で、最新の装備をしていると思っているだろうが、それ

は大間違いだ。霞ヶ関の本庁など、電源のタップやインターネットに使うLANケーブルなどを、床下ではなくカーペットの下に通し、歩くときにつまづかないようにガムテープでケーブル類を補強している場所も多い。こんな民間のオフィスなんて見たことがない。まあ、あるにはあるが。

「東京のほうでは、隣や近所の人になにしとるか知らんやろうけど、こっちでは逆に村人意識か強いバツェン、なかなかよそモンに対しては口を開かんばい。やなじ福岡県でも違う地域の人には、なにになにモンツち言うんばい。私が前にいた北九州市なんて、おなじ市なのに小倉モンとか八幡モンとか若松モンとか言っちゃるけんね。そんで特に字水野町はダム戦争のあったときは、旧村民同士で疑心暗鬼の争いがあったもんやけん、よそモンに対しては東京モンよりも冷たいかも知れんばい。バツェンもう昔のことやし新村民も増えたから、イガミ合っちゃる人のほうが珍しかばい。そげんところもあって大変やろうけど、まあ殺人事件でもないけん、遠慮うせず気長にやっちゃりい」

「そうみたいですね。なにか話しかけたただけなのに、警戒をした目で見てるのがわかりますよ」

ダム戦争ってなんですかと訪ねるのだが、飯田一成町長がきましたと巡査から呼ばれ、黒田が去ってしまう。こんな田舎でも昔は大変なことがあったみたいだなと上着を脱ぎ、調査書をまとめるために自席のある部屋へ階段を上っていると、背後から自分の名前を呼ぶ声が近づいてくる。

「大林さん、大林さん」

「上島さん、お疲れ様です。今もどってきたところですか」

「ややっ、お疲れ様です。いや、もう十七時にはもどってきたばいが、チョット軽く一杯やりにいきましょうか」

「今からですか。すみません、書類をまとめたいので、あと一時間くらいは」

「今から酒も飲みたいけんが、今日は高校のときのダチと飲みに行くんで、今度いこうばい。食堂で茶一でも飲まんねっち意味ばい。チョット聞きたいことがあるけん、忙しいところ悪かばい」

「ああ、そうですか。いきましようか、僕も喉が渴いていたので」

酒を飲むのは好きだ。むしろバツイチで女もいない今は、酒を引っかけに行くことでストレスを発散していると言っても過言ではない。まあしかし、そろそろ酒ではなくなにか趣味でも持たないといけないな。またギターでも始めるか。

誰もいない三階にある食堂は三十人も座ると窮屈な狭さだ。座っている大林に上島が冷えたエメラルドマウンテンを差しだしむかいに座る。

「すみません。ここの自販機は百円ですよ」

「もう大人やし、百円くらいいいとよ、そげなん気いつかわんでも」

「それでは、いただきます」

なにか俺のこと言っちょらんかった。あん人は最近意味もなく俺に辛く当たるけん」

「いいえ、なにも言っていないでしたよ」

「ホント」

「はい、本当ですよ。上島さんが手伝ってくれて本当に助かっていますって、署長にも言っておきました」

「そうか、悪かばい」

しかし上島さんや署長に限らず、この田舎の人達は男も女も背が高いのと、満面の笑みでエメラルドマウンテンを飲む彼の体軀を見ながら思う。自分もそんなには貧相な体ではない。それでも最近は、腰のベルトは腹の肉を乗せるためにあるとばかりに、確実に腹がでてきた。昔は食べなくても太らない体質だったのに、今ではチョット大食いすると翌日ベルトに当たる腹がきつい。タバコを止めたの

がいけなかったのか、それとも酒を飲む量が増えたのがいけないのか。どちらにしろ、このままでいいことではない。

「上島さん今日はどうでしたか、なにかいい情報でもありましたか」

「おおっ、そうだった。田島の通っていた中学と高校にいったけど、マジでまいったばい。田島が通っていた土手ノ内中学校は俺の母校で、担任も同じ櫛野やったんばい。もう二十年も昔のことやのに、担任が俺のことをよ一覚えちよって、昔話なんか初めてなーがい長い。いや～マジでまいったばい。まあそのおかげで、聞いてもないことをベラベラと喋ってくれて助かったばい」

「それは大変でしたね。ご苦労様でした」

「大変ばい。まだガキ扱いしよって、あの柔道バカがあ」

「上島さん、昔悪いことしていたんじゃないですか」

「そんなことなかとよ。今はチャラけちよるけど、中学高校と柔道漬けの毎日で、女子連中とも口聞かん硬派だったんばい」

上島が笑いながら眉毛一つ動かさずに、飲み干したスチール缶を、紙コップのように左手で握り潰すのだ。

大林は資料を再確認する。

遺体が発見されたのは、平成二十二年七月七日水曜日午前五時二十分ごろ。東京都板橋区高島平にある高島平団地二-二十九-一から三に囲まれたLちゃん広場内である。同団地二-二十九-三に住む出勤途中の会社員、松浦均(二十九歳)が、公園内にあるブランコの鉄棒に、三十二歳から十六歳の男女八人が、首吊り自殺をしているのを発見し110番通報をした。

死亡したのは以下の八名、田中俊二(三十二歳)、津田実(二十五歳)、佐久良修(二十一歳)、筒井豊(十四歳)、土村サトシ(十一歳)、木村勇氣(九歳)、加治木唯子(二十六歳)、鈴木ゆりか(十三歳)。全員知的障害者であり、障害者認定を受けている。

死亡推定時刻は同日午前二時から午前三時までの約一時間あいだで、死因は全員、首吊りによる窒息死。

しかし不可解な点が幾つもある。

その一・八人とも全くの関連性がない。住んでいるところは全員都内ではあるが、それぞれべつの町に住んでいて、高島平団地周辺に住んでいる者はいない。働いている職場も通っている学校も違い、家族達も面識がない。また家族達が知らないだけで交流があったのではと、所持品や携帯電話のアドレス帳や通信履歴を調べてみたが、関連性は見あたらなかった。またいつ彼等が家を抜け出したのか、全員の家族が気付いていないのだ。

その二・首吊り自殺をする前に、全員が自分で自分の両目をくり抜いている。くり抜いた道具はバーベキュー用のステンレス製の串で、先端部分をカギ爪状にペンチで曲げ、目に突き刺し眼球を引き出した後に、ハサミで血管部分など繋がっている所を切断した。バーベキュー用の串とペンチは、田中俊二が自宅から持ち出した物だとの、父親の証言を得ている。またハサミはそれぞれが自宅から持ち出した物を使用し、自分の眼球を切断したことが指紋により判明している。この行為をするさい、痛みのための声を上げたことがない可能性がある。団地内に住む誰もが呻き声などを聞いていないのだ

その三・両目がない状態でどうやって首を吊ったのか。首を絞めたロープは筒井豊が、当日『東急ハンズ池袋店』で購入したことがレシートとビニール袋から判明している。しかし彼等は、どうやって二桁以上の高さにあるブランコの鉄棒にロープを巻き付けて吊し、その輪の中に自らの首を通したのだろうか。彼等の中で一番背が高い佐久良修でも百六十八cmであり、一番背が低い鈴木ゆりかにいたっては百四十九cmだ。佐久良修が七人を抱き上げて吊していったのだろうか。その後に自分の目をくり抜いて首を吊ったとしても、現場周辺には足場となる箱や脚立が発見されていない。だとしたら目のない状態で痛みに耐え、手探りでブランコをよじ登り、首を吊ったのだろうか。

そこで考えられるのが九人目の人物の存在だ。現時点では田島雅之(二十五歳)の可能性がある。

田島雅之がどのような経緯で八人と知り合ったのか調査中だが、東武東上線東武練馬駅周辺で、彼等のうち何人かといるところを目撃した証言がとれている。

最初の目撃は六月八日火曜日『マクドナルド東武練馬店』である。二階席の隅で田中俊二と十時ころから十三時ごろまでのあいだ、購入したセットメニューを食べることなく、むき合っているのを、従業員四名が証言している。

二度目の目撃は六月十日木曜日『板橋サティ』の一階グルメコートにおいて、津田実と加治木唯子と三人で、十二時ごろから十五時ごろまでのあいだいたのを、従業員二人が証言している。

三度目の目撃は六月二十五日金曜日、東武東上線下板橋駅の下りホーム側のベンチに座り、田中俊二と二人で十三時ごろから十五時ごろまでいたのを、駅員六名が証言している。

四度目の目撃は七月一日木曜日、板橋区北町の田島雅之が住んでいるアパート山口荘だ。数人の男女が彼の部屋に入っていくのを、二つ隣の部屋に住む田村光が証言している。なおこのときに部屋に入った者が誰なのか、彼が覚えていたのは鈴木ゆかり一人である。

事件当日、七月六日の夜から七月七日の早朝にかけての田島雅之のアリバイはないが、同日の正午ごろにきた父、雅夫と運送会社ファンシー引っ越しセンターと一緒に、アパートを引き払うための引っ越し作業をしている。引っ越しといえば聞こえがいいが、三ヶ月間の家賃滞納で部屋を追いだされることになり、両親のいる故郷、福岡県霞が住市字水野町へと帰ることになったのだ。

仕事は三月末日付けで『株式会社はぴねす清掃』を暴力事件で解雇。勤務態度はあまりよくなく、遅刻や病欠も多かったとのことだ。職場とプライベートとも友達がいなかったらしい。

家族構成は『株式会社山口鉄工所』専務の父、雅夫(四十九歳)、専業主婦の母、郁子(四十九歳)、『株式会社柊和菓子製菓』勤務の

妹、智子(二十一歳)。田島雅之と家族との関係は悪く、十八歳の時に引きこもりを止めて上京してから、七年間一度も里帰りをしていない。

小学校、中学校での成績は中の中で、勉強も運動も可もなく不可もない。字水野高校は入学後すぐに引きこもりになったため、同年の八月に自主退学している。引きこもりになっていらい、友達付き合いはなくなったようだ。三年間の長い間の引きこもり生活の後に、なにを思ったか突然東京に行くことを決意した。

今まで付き合い合っていた女性はいない。ただ中学三年生の二学期から卒業するまでのしばらくのあいだ、同級生の浅田祀(享年十五歳)と付き合い合っているのではないかと噂されたことがある。しかし浅田祀は中学を卒業した平成十三年三月二十七日火曜日に、実家である狗側降霊会の自室で首吊り自殺をして、死亡しているのが発見された。その直後から田島雅之の言動がおかしくなり、人付き合いも悪く内向的な性格になったらしい。現在狗側降霊会は、平成十六年六月十二日土曜日に、代表である浅田丸姫(享年七十九歳)の心筋梗塞による死亡後、宗教法人を解散してその後の活動はしていない。

現在、田島雅之は行方不明であり、先週搜索依頼がだされている。実家に帰ってきて一週間後に突然姿を消し、両親は心当たりや理由がわからないそうだ。両親に会って話をしたときの感じは、心配をしていない雰囲気であった。

コイツはたぶんシロだろう。大林は溜息混じりに伸びをして、DynaBookのWordデータをFDDに保存する。確かに自殺をした人達との接触があり、事件当日夜のアリバイはないが、現場に彼の存在を示す証拠は発見されていない。考えられるとしたら、自殺のやり方を教えたことくらいだ。

こんな事件性も薄い内容なので、専任で捜査をしているのは大林一人だけだ。高島平署で他に動いている者もいるのだが、他の事件のついでに捜査をしているほどで、まったくあてになどならない。だが他殺の可能性がないとしても、死因が不可解なので捜査をしな

ければならない。また遺族に報告をしないといけないので、形だけはちゃんと残しておかないとならない。なんだか妙な事件の担当にされたなど、口にしていた禁煙パイポを噛む。

でもチョット待てよ、ひょっとして遺族に説明するのは俺なのか。冗談じゃない。苛ついてDynaBookのモニターを閉じる。嫌だな、親御さん達は泣くのだろうな。中にはちゃんと調べたのかと逆ギレをする人もいるだろう。大林は何年たっても遺族に説明することに慣れず、彼等が納得のできない結果を説明するときは、どうしても言葉がつまってしまう口レツが回らないのだ。それで相手の不安をかき立てるか、自信のない言葉で感情を逆撫でさせているのか、遺族に怒鳴られたことが何度もある。情けない、弱みを見せて付け込まれているのか。そんなときは堂々と事実だけを話し、適当に苦渋の表情の演技をすればいいだけなのに、いつまでたってもできない。これだからもう出世はできないだろうなどと、最近の仕事に対する諦めを感じている。正直なところ変な事件をあてがわれたと思っている。田舎でのんびり時間を潰すにはいいが、本当のところ左遷気分がしならないのだ。

さてと、帰るとするか。右腕の白色のスウォッチを見るとすでに二十二時十分を回っている。滞在中の宿は、所轄の寮の空き部屋を借りている。寮に行く西鉄バスの時間は二十二分の次が五十三分の最終で、それを過ぎてしまうと四十分歩くかタクシーに乗るかだ。東京と違って繁華街も閉まるのが早い、この時間になると開いているのは小料理屋かスナックだけで、それも二十四時には閉店する。また商店に限らず飲食店も、ほとんどの店は十九時には閉店している。ああ夜通し酒が飲めて遊べる池袋や新宿が懐かしい。もっともここ五、六年は歳のせいかわたし体力が落ちているせいかわたし、その両方か。たぶんその両方だろう、夜中の三時を回ると起きてるのが辛くて、とてもではないが昔のように明け方五時まで酒を飲み、翌日仕事をするなどできない。ここの人達は、夜中はどうして過ごしているの

だろうか。車に乗って田んぼの中のカラオケボックスか、博多の天神まで行って遊ぶのだろうか。

明日はどうかとシステム手帳をめくる。田島の妹にでも会いに行くかと写真を見る。

田島智子。地元の県立土手ノ内高校を卒業後は、新卒でずっと飯塚市の株式会社柊和製菓勤務。職場までは西鉄バスで通勤。勤務態度はいたってマジメ。兄の雅之を毛嫌いしているもよう。

兄を嫌っているのはいいが、俺のことをウザそうに睨むし、俺より額一つ分背が高い。吊り目なのだろうか、それとも睨んでいるから吊り目に見えるのだろうか。大林は写真に写る智子の額に、デコピンをするのである。